



歴史と目的

2022ランベス会議
「ランベス・コール」
(ランベス会議からの呼びかけ)
プロセスへのガイド



ランベス会議の歴史

1867年、カンタベリー大主教チャールズ・トーマス・ロングリー師が、後にアングリカン・コミュニオンとなる国々の主教をランベス公邸に招き、会議を開いたのが第一回目のランベス会議でした。

1867年の第一回ランベス会議には 76名の主教が出席しました

この招集の背景には、大きく二つの課題がありました。一つは、世界中の多くの主教が、共に祈り、聖書を学び、話し合うために集まりたいと切望していたことです。もう一つは、世界中の主教の間に意見の相違をもたらしていた牧会的、神学的な難題に目を向けることでした。これらの課題は、キリスト教の福音が異なる文化圏でどのように表現されてきたか、またどうあるべきなのかということと関連していました。したがって、宣教学的であり、牧会的なものでした。

この会議は、招待されたすべての主教が出席したわけではありませんでした。また、提示されたすべての問題を解決したわけでもありませんでした。ヨーク大主教をはじめ、何人かの招集された主教たちも出席しませんでした。この会議が「総会」としての権威を主張するのではないかという懸念がありましたが、13の決議がなされた一方で、ロングリー大主教は、一部の人々の期待にもかかわらず、この会議が世界中の聖公会の総会ではないことを明言しました。ランベス会議は、アングリカン・コミュニオンの諸教会への教会法制定や、活動の強制をしたりする権限を持たないという原則は今も変わりません。

「ここでは、主教たちはまさに話し合うために来ているのであって、コミュニオンの諸教会を拘束するような決議を下すためではない」

ランベス会議は、聖公会の各地から主教が集まり、話し合い、彼らの同僚性と世界に対して証人としての共通意識を表明する場として存続しています。

聖公会一致・信仰・職制常任委員会 (IASCUFO) の重要な論文『Towards a Symphony of Instruments (それぞれの器の調和に向けて)』に言及されているように、「ランベス会議は、法的な状態にない同僚的行事と見ることができる。ここでは、主教たちはまさに話し合うために来ているのであって、コミュニオンの諸教会を拘束するような決議を下すためではない」。ランベス会議は、アングリカン・コミュニオンの4つの器 (Instruments) の一つであり、もう一つの器としてのカンタベリー大主教が、主教たちを集まるよう呼びかけます。





アングリカン・コミュニオン

アングリカン・コミュニオンが何であるか、そして何ではないのかに言及することは大切なことです。アングリカン・コミュニオンとは教会の共同体、交わり、あるいは家族を指す言葉です。各教会は、互いに支え合う関係にあり、自律的で自治的な存在です。

コミュニオンの4つの器：

- ・ カンタベリー大主教
- ・ ランベス会議
- ・ 全聖公会中央協議会（ACC）
- ・ 首座主教会議

キリスト教の世界的な共同体として、アングリカン・コミュニオンはアイデンティティと構造を有しています。コミュニオンの4つの器

（Instruments）は、決議し、キリストの福音の証人として、世界に発言することができます。また、祈り、知恵、経験に基づいて、加盟教会を励まし、助け、助言をすることができますが、拘束したり強制したりすることはできません。それぞれの器の決定、そしてコミュニオンの諸教会における伝統と慣行はそれぞれの教会を決定母体として実施、実現されていきます。各教会はそれぞれに自分たちが重要だと信じる事柄をどのように受け取るかを検討します。特筆すべきは聖公会諸教会において、その受けとめ方は異なるということです。アングリカン・コミュニオンは影響力と権威を持っていますが、それを構成する教会に対する、あるいは教会内での法的な権威を持っているわけではありません。

ランベス会議には世界中の主教が集まります。それぞれが自分の教区で、教区内の教会の法規と慣習に従って影響力と権威を持っています。しかし、主教は決して孤立してその監督の務めを行使してきたわけではありません。聖公会の伝統では、主教は他の同僚主教と相談し、聖職者やすべての信徒と協力してその役目を果たすのです。



アングリカン・コミュニオンはそれ自体が「教会」なのではなく、加盟する諸教会によって一つの体であり、各々はイエス・キリストの唯一、聖なる、普遍的で使徒的な教会の一部なのです。

アングリカン・コミュニオン内でのランベス会議の位置づけ

ランベス会議は、長年にわたり、また文化の違いを越えて、アングリカン・コミュニオンの教会生活を形成する上で、重要な役割を果たしてきました。ランベス会議は毎回、主教たちが共に祈り、礼拝を行い、聖書を学び、話し合う時間を確保することを優先してきました。そして、教会は神の世界の中に存在し、神の世界に仕えているがゆえに、主教たちが集まる時には常に深刻な課題に直面してきました。

これまでのランベス会議での主教たちの考えは、決議録を通して発表されました。これらの決議は、教会の生活とミッションのあらゆる分野に影響を与えてきました。決議は、教会（聖公会とエキュメニカルな姉妹教会の双方）と政府、個人と社会全体に呼びかけています。しかし、どの決議の権限も制限されたものです。「所属教会には、ランベス会議の決議の受容と、自身のコンテキストにおいてどの程度の権限を持つかを決定/識別するための明確なプロセスがあります。」

「各自治教会は、独自の統治と法の制度によって、その活動を自由に秩序づけ、規制することができる。」

アングリカン・コミュニオン各教会に共通する法憲法規の原則

ランベス会議は、アングリカン・コミュニオン内、またコミュニオンを構成する各教会のために、常に重要な役割を果たしてきました。ランベス会議は所属教会が重要な決定を下す際に、それを奨励し、可能にしてきました。それは、コミュニオン/世界全体の無数の文化における神の宣教への呼びかけについての識別する力を与えてきました。





ランベス会議 2022

2022年、ランベス会議は、1978年以来毎回開催されているカンタベリーを会場に行われることになりました。

カンタベリー大主教は再び主教たちを招き、礼拝、聖書の学び（特に1ペトロ）、祈り、協議を行います。

また、恒例となった主教のパートナーも関連プログラムに参加できるよう招待され、エキュメニカルな参加者も多く参加し、より広い教会の中でのコミュニオンの位置づけを表現しています。

主教たちは、神の世界と神が直面している重大かつ差し迫った問題がある時に集まります。気候変動、世界的な感染症大流行の影響、優越主義、戦争、弱者に対する暴力行為は、神の像／神の姿に作られたすべての人間の尊厳を脅かします。

クリスチャン間の分裂、科学と倫理への異なるアプローチ、宗教の違いを超えた緊張関係、そして迫害というスキャンダルは、聖霊が教会を宣教と福音伝道に召し出す中で、深い識別を必要としているのです。

ランベス・コール (ランベス会議からの呼びかけ)

2022年のランベス会議では（2008年の会議と同様に）、決議が出されない予定です。カンタベリー大主教は、集まった主教たちの議論と決定に際して「ランベス・コール」と呼ばれるプロセスを採用することを決定しました。

2022年のランベス会議の主教たちは、聖書（特にペトロの手紙1）の学びに基づいて提示される一連のテーマにおいて、今日の教会と世界に対する神の呼びかけを考えるために招かれます。

ランベス・コールの目的は、神へのより深い忠誠を可能にし、コミュニオンのミニストリーを促進し、世界中の教会と共同体が呼びかけに広く参加できるようにすることです。

ランベス会議のテーマ:

- ・ 宣教と福音伝道
 - ・ 和解
 - ・ セーフ・チャーチ
 - ・ 環境と持続可能な開発
 - ・ キリスト者の一致
 - ・ 宗教間対話
 - ・ 聖公会のアイデンティティ
 - ・ 人間の尊厳／アイデンティティ
 - ・ 弟子であること
-

各テーマについて、主教たちは共に学び、経験を分かち合う時間を過ごします。また、それぞれの主要なテーマについて検討するための文書も用意されます。文書は、キリストの教会がこれらの事柄について常に教えてきたことについての要約、今日これらの事柄について主教たちが伝えたいことの要約、そして将来の証しへ向かうための具体的な「呼びかけ（コール）」を含むような形で作られる予定です。すなわち、これらのテーマについて、私たちはお互いに、仲間のキリスト者たちに、そして世界に対し、どのような行動、変化、挑戦を与えたいと考えているのか、ということを表します。

それぞれの「呼びかけ」の中には、議論すべき事柄や決定すべきことがあります。すべての主教がすべての呼びかけの要素に声を添えたいと思うとは限りません。これまでランベス会議のたびに行われてきたように、主教たちは共に協議しますが、必ずしもすべてに合意するわけではありません。それぞれの「呼びかけ」は、首座主教や年配の主教が率いる、コミュニオンからの主教、聖職者、信徒からなるグループによって起草されます。

その意図は、会議におけるそれぞれの「呼びかけ」を公表し、それぞれの「呼びかけ」に含まれる成果を受け取り、実行することができるプロセスを確保することにあります。加盟教会は、それぞれの総会や他の組織でそれらの呼びかけを検討するよう招かれるでしょう。2023年のACC（全聖公会中央協議会）では、「呼びかけ」に含まれるいくつかのテーマが議題となることが予想されます。

大主教がこのように決議から「呼びかけ」への変更を行った理由は、決議という言葉が、拘束力のある法的な決定を意味し、会議の権限を超えるものだからです（この冊子でも指摘されています）。「呼びかけ」は、1998年の会議まで、いわゆる「決議」とされていた内容を表しています。「呼びかけ」とは、会議の決定であり、コミュニオンの各教会に対する要請の形を取って、慎重に検討し、希望としてはそれに従い、それぞれの状況においてそれに応じるようにと促すものです。



まとめ

ランベス会議は、カンタベリー大主教に招かれた主教たちが、共に祈り、協議するための集まりです。ランベス会議は、コミュニオンの加盟教会を拘束する決定を下す権限を持ったことはありません。ランベス会議は、常に影響力を持ち、加盟教会やそれ以外の教会に伝えることのできる決定を行い、それを加盟教会とそれ以外の教会に伝えることができます。

この会議は、世界とアングリカン・コミュニオンに連なる諸教会の生活とミッションに影響を与える重要な事柄について、主教たちが協議する機会を再び提供します。この会議では、議論されている主要な諸議題に関連するいくつかの「呼びかけ」が出される予定です。会議では、主教たちはそれぞれの「呼びかけ」の一部として決定を下すことが求められ、会議の「呼びかけ」に声を加えるよう招かれます。また、主教

たちは、自分たちの教会でそれらの「呼びかけ」が聞かれること、またそれらの「呼びかけ」を前進させ、実現するために自分たちの役割を見極め果たしていくようにと招かれています。

神のいつくしみによって、教会は生ける主の御言葉を聞き、それゆえに生ける希望に呼ばれています（1ペトロ1:3）。苦しんでいる苦しみの中にある教会は、苦しみの中にある苦しんでいる世界のただ中で、喜びのうちに歩むように召されています（1ペトロ1:6-9）。私たちは共に、聖なる証しをするよう召されているのです（1ペトロ1:13-16）。このため、カンタベリー大主教はこのランベス会議に「**神の世界のための神の教会：共に聞き、共に歩み、共に証しする**」というタイトルをつけました。私たちが生きるこの時代のために、コミュニオンの主教たちは、神の教会と神の世界に対する神の呼びかけを見分け定めるよう招かれています。



LAMBETH
CONFERENCE



www.lambethconference.org
info@lambethconference.org

対話をフォロー

[f www.facebook.com/LambethConference](https://www.facebook.com/LambethConference)
[t www.twitter.com/LambethConf](https://www.twitter.com/LambethConf)